

## 「重荷と慰め」

ガラテヤの信徒への手紙6章2～5節 フィリピの信徒への手紙2章1～5節

学校法人聖学院理事長・聖学院大学学長 清水正之

今日、若い世代のスポーツ選手が活躍しています。スポーツの分野で若い世代の人たちが目ざましい活躍をしていることは、見ていて大変気持ちが良いことでもあります。立てた目標と成果が非常に見えやすい分野ですので、これを例にとるのもその理由です。ただ、私は良い結果である・悪い結果であるという問題よりは、皆さんに一度関心をもってもらいたいのは、一流の活躍をしているスポーツ選手が、その試合の前後の会見、あるいは試合直後の会見などで、自分の言葉で、自分が今、どうしてここにあるのか。どのような経緯を経てここにあるのか。今、自分の状態はどうか。また自分のこれからの課題はどうか。そしてさらには、支えてくれた人々への感謝、あるいは観衆への感謝を非常にハツラツと率直に述べていることに、しばしば感銘を受けます。たとえばテニスの大坂なおみ選手、あるいは水泳の池江瑠花子選手、あるいはクライミングでランキング第1位になった野口啓代選手、あるいは100メートル走の山縣亮太選手、あるいはフィギュアスケートの羽生結弦選手等、それぞれに大変重い課題を抱えながら前向きにその重圧を軽々と、そして非常に率直に表現していることに私は大変感動します。そして本来重荷であるはずのものを、彼らは自分の中で新しい楽しさに、喜びに、そして希望に変えていく。その姿が話のポイントであります。それぞれが自分を等身大に見つめながら行ってきた努力。そして今、自分がどういう状態にあるか。今後、何を克服し、次に向かうべきかを語っているところは壮健です。しかし一方で大坂なおみ選手はしばらくの間、抹茶アイスクリームとカツカレーはお預けであると言っていました。築き上げ、鍛え上げた筋肉にとって、少しの脂肪でもそれを阻害するものとなるから、それに耐えて、目標に向かっていくことは大変面白く興味深い言葉でした。それ以上なことは全米で優勝したときのことです。観客が大変なブーイングを相手の選手に向けていましたが、そこで彼女は「みんな彼女(ウィリアムズ)を応援していたのを知っている。」「こんな終わり方ですみません。ただ試合を見てくれてありがとうございます。本当にありがとう。」「プレーしてくれてありがとう。」と、その一言二言で一挙に観衆がブーイングをやめ、率直な彼女の言葉に感銘を受けるということがありました。大変な重荷を背負いつつ、そうした状況の中で、的確な、奇をてらわない、しかし率直な言葉をのべ、日々の鍛錬を、そうした重荷を着実に楽しみに、喜びに、そして希望に変えていく。大坂選手らしい言葉だったと思います。

最近の話になりますが、スポーツの中では様々なパワハラ的事件が今でも明らかになります。それ以上に、少し前までは大変に重苦しいものがスポーツの世界を覆っていたと思います。全学礼拝時に話すという点でふさわしいことかはわかりませんが、東京オリンピックが開かれたときに、今では良い思い出だけが語られています。少年としての多くの心を非常に強く打ったのは、マラソンの円谷幸吉選手の自殺でした。彼はマラソンで下馬評は高くなかったのですが、最終的には2位で国立競技場に戻

ってきたのです。円谷は一生懸命に走っているのですが、後ろを振り向かなかったことも 1 つの理由でしょうが、3位の選手に抜かれて、銅メダルに終わるという出来事がありました。それから 4 年後のメキシコオリンピックが開かれる年の 1 月に彼は宿舎で自殺しました。彼にとって、観衆の真ん前で 2 位であるのを抜かれたということの重圧があったのでしょうか。次のオリンピックでは金メダルを取ると公言しつつ、努力していたのですが、恋人との別れや、腰痛の悪化等、どこかでもう耐えられなくなって、オリンピックの直前に自殺したわけです。

礼拝の始まりに聖書の言葉に耳を傾けたあとで、こうしたものを読み上げるのは少しはばかられますが、彼の残した遺書があります。最初は身内の間で広まっていたものが、ある種の感動を呼ぶものですから、社会に広まりました。今ではネットでも読めます。冒頭が

「父上様母上様、三日とろろ美味うございました。干し柿、もちも美味うございました。敏雄兄姉上様、おすし美味うございました。」

10 数行にわたって家族・親類・知人からいただいたごちそうへのお礼が書かれ、その後に

「正男兄姉上様お気を煩わして大変申し訳ありませんでした。

幸雄君、秀雄君、幹雄君、敏子ちゃん、ひで子ちゃん、

良介君、敬久君、みよ子ちゃん、ゆき江ちゃん、

光江ちゃん、彰君、芳幸君、恵子ちゃん、

幸栄君、裕ちゃん、キーちゃん、正嗣君、

立派な人になってください。

父上様母上様 幸吉は、もうすっかり疲れ切ってしまっただけで走れません。」

彼はこのような遺書を残して自殺したのです。こういう時代の背景は確かにあって、国を背負い、日の丸を背負って、重荷を背負って、スポーツというのはそのようなある種の重苦しい裏面をもって今に至りますが、あるときから、若い世代がそうした意味での重荷を社会や国旗に託すのではなくて、自分に課せられた課題として前向きに受け止め、様々に業績を上げている姿を大変興味深く見えています。

さて、自分に課せられた重荷というスポーツ選手の話を取り上げましたが、私たちの人生は多かれ少なかれ、同じような課題、あるいは重荷を背負っています。そして、先ほど申し上げたように、私は特にスポーツを例にとり上げて申し上げるのは、そうした重荷を彼らは彼らなりに、もっと肉体的な重荷を背負いながら、自分の弱点を知り、強みを知り、自分を等身大で見つめ、過剰に謙遜するでもなく、高ぶるでもなく、その今の自分の在り方を克服しつつ、新しい課題と次の目標を立てていく。そういうことが、私たちを大変小気味よく爽快にするのだと思います。そして私たちの目からみても、彼らが課せられた禁欲的な、ときに酷使するような重荷を転じて、自分の前向きな希望として高めている所に、大変な興味深さを感じる次第です。

最後に、昨日はタイガーウッズがゴルフで5年ぶりに優勝しました。以前は、10 年間世界ランク1位

でしたが、5年ほど前にスキャンダラスな事件を起こし、更に3年前にも事件を起こし、ついには世界ランク 1000 位以下まで順位を落としました。彼の完全に自分を見失っているような眼差しであり、顔つきである姿がよく報道されていましたが、昨日の優勝後の会見では「もう自分はだめだと思っていた。しかし、自分のスイングを見出すたびに、少しずつ自分を取り戻してきて、少し高めにいけるのではないかと思うようになった日々であった。」「その挫折から立ち直る自分が見えてきた。」ということを書いていました。私たちの歩みも、それぞれに課題を、そして重荷を背負っています。そして同時に、私たちはスポーツ選手にとっての観客や国や社会であるのと同じように、身内、友人、あるいは自分を支えてくれる人など、社会との関わりの中で生きております。今日、二箇所にもわたって読んでいただきました聖書の言葉を、是非皆さんにも自分でその前後も含めて読んでいただきたいのですが、聖書の言葉は、重荷や課題を背負った私たちの生き方を導いてくれる言葉に満ちています。弟子たちに与えたこの書簡の部分は、イエスの使徒たる者、教えを奉ずる者たちがその信仰を強め、布教に自ら向かっていく力を与えるための励ましの部分であります。その部分を特に繰り返しますと、例えばガラテヤの信徒への手紙では「実際には何者でもないのに、自分をひとかどの者だと思ふ人がいるなら、その人は自分自身を欺いています。各自で、自分の行いを吟味してみなさい。そうすれば、自分に対してだけは誇れるとしても、他人に対しては誇ることができません。めいめいが、自分の重荷を担うべきです。(ガラテヤ6章3～5節)」とあり、このあとに「御言葉を教えてもらう人は、教えてくれる人と持ち物をすべて分かち合いなさい。(ガラテヤ6章6節)」という言葉が続きます。同時に、その後に読んでいただいたフィリピの信徒への手紙では、それが一つの慰め、その重荷を背負っていくことが最終的には一つの喜びであり、慰めであることを教えてくれます。二つの箇所から、私たちが背負った重荷から、喜び、そして重荷を誠実に背負い、果たすことで、慰めと喜び、愛に満ちた生活に至るということを教えてくれると、私は自分の信仰の中でも考え感じています。課題に誠実に向き合い、自分の変化を忍耐強く、そして丁寧に担っていくこと。自分を束ねる力を失わないで、その在り方を着実に、丁寧に繰り返していくこと。ガラテヤの信徒への手紙の6章9節では「たゆまず善を行いましょ。飽きずに励んでいれば、時が来て、実を刈り取ることになります。」という言葉が与えられています。そのような飽きずに励む「私」にこそ、神が励まし、慰めが与えられ、新たな希望、楽しみが与えられるのであります。そのような器となる。実践する器となる。それが、信仰によって与えられる強みだと言って良いと思います。その最後に、神の慰めと信仰への希望、自己への謙遜、それと他者への愛、誠実ということ。この三つの要素がこうした二箇所の読み上げた聖書の中に渾然一体となっていると私は読んでいます。

今日は皆さんにあまり馴染みがない人もいるかもしれないスポーツ選手のことを例にとりながら、自分の今の在り方をしっかりと押さえ、等身大の自分として掴んでいくこと。それを言葉にしていこうとすることが着実に次へのステップにつながっていくのだということをこの全学礼拝の機会に一度、考えてみて欲しいと思って、お話いたしました。

2018年9月25日 聖学院大学 全学礼拝シリーズ礼拝「創立30周年を覚えて」